

タ リ タ ・ ク ム

“Talitha, koum”

「少女よ、わたしはあなたに言う。起きなさい」(マルコ5:41)

日本聖公会 正義と平和委員会・ジェンダープロジェクト

第 7 号

2007年9月25日

発行人: 吉谷かおる

「実に、キリストはわたしたちの平和であります。二つのものを一つにし、御自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し、規則と戒律づくめの律法を廃棄されました。」(エフェソの信徒への手紙2章14節)

司祭 笹森田鶴 (東京教区)

7月5日～7日の三日間、沖縄教区島袋諸聖徒教会にて第15回女性フォーラムが、「いちやりばちょ～で～(出会えば姉妹)」のテーマの下に開催されました。沖縄の女性たちの配慮の行き届いた準備によるプログラムに沿って、部分参加も含め50名を越える方々の祈りと情熱と知恵とを重ねながら過ごした貴重な時でした。

プログラムの中心は「ゆんたく(分かち合い、おしゃべり)」でした。与えられたテーマに基づく分科会などでのゆんたくはもちろんのこと、二人以上が集まればそこはすでにゆんたくの場です。誰かの話を聴く、わたしも話を誰かに聴いてもらう、という関係を開催中のあらゆる時間を用いて構築していきます。自分たちの文化について、習慣について、生活環境について、政治について、周囲の価

値観とクリスチャンとして大切にしていきたいと願っている価値観とのギャップについて話を進めていきました。

すると他人事のように決して語れない自らの命の根幹に関わるような部分や、自分のこれまで生きてきた道程に触れざるを得なくなります。痛みについて、傷について、しかも長く心の奥にため込んでいた部分について、少しずつ言葉を探しながら、時には慟哭しながら信仰の友に表現していきます。聴く者にとっては、これまで近い関係だと思っていた姉妹から初めて聴くような思いを向けられることで、わたしたちの関係は実は遠かったのだろうか戸惑ったり、あまりの重さに受けとめきれなかったり、理解しきれないことであつたりもします。

しかしそれがわたしたちの現実であり、本当の姿であるのでしょうか。そして目に

見えない壁があったことに気づき、それまでの関係に戸惑うことは大きな変化でもありましょう。遠くあったそれぞれの存在が少なくとも以前よりは近い場所に距離を縮めたからこそ、その壁を確かめることができるのだと思うからです。

もっとそれぞれが近づくために、本当の和解の関係がわたしたちの中に生まれるために、キリストはその血と肉をささげてくださいましたことを記憶したいと思います。キリストにおいてわたしたちがひとつとなつてということは、弱肉強食が実現することではなく、未知のものや異質のものが遭遇することで、これまでとは全く違う新しい存在や新しい関係がキリ

ストによって生まれ出てくることです。神が実現されようとする平和は、関係性の課題を持ちます。この敵意もなく、隔ての壁もない新しい関係性は、キリストの十字架、苦しみと死によってわたしたちにもたらされたものです。すでにキリストの血は流れているのですから、本来もうそれで十分なはずなのです。

わたしたちの現実の距離とは別の関係性の距離をどのように縮めていくことができるのかという課題を改めて思わせられると同時に、神がわたしたちを和解、一致、平和のために呼びだして下さっていることを互いに確認することのできた三日間でした。

「終わってみれば、沢山の笑顔とありがとうが・・・」

高嶺初子 (沖縄教区・第15回女性フォーラム事務局)

残暑お見舞い申し上げます。8月半ばを過ぎて気温40度を超える記録的な暑さと、地球温暖化の影響による気象異変が次つぎと各地から報じられ、本気で何か今出来ることをしていかななくてはと緊張感を覚えるこのごろです。

ところで第15回「女性フォーラム」の報告書は、お手元に届きましたか？

(聖霊なる神さま、わたしたちのところにおいでください。わたしたちの心を燃やしてください。)と祈るフォーラムの祈りは確かに聴き入れられたと、誰もが喜びを共感できた3日間ではなかつ

たでしょうか？ 15回目を数える「女性フォーラム」を沖縄で開催するという話が具体化してきても尚、正直なところ私のスタンスは定まっていませんでした。第1回女性会議に参加したメンバーは即実行委員ということにもいささかとまどいつつ、「まあ、サポーターとして...」と曖昧な気持ちのままでした。後々スタッフに足並みを揃えることが出来ない原因になったと反省しきりです。

「小さな群れ」ながら女性として、希望し、信じて、草の根の活動を続けてき

て 15 回の歴史を紡いできたこと、そして誕生した女性教役者の支援、教会内外に在る課題についての学びは、参加してみても理解できたことでした。コントの問題提起は大好評！！

沖縄でのプログラムは、朴司祭による開会礼拝、新城司祭の「キリスト教とトートーメーの話」、「韓国と沖縄で出会った女性たち」と題する朴司祭の講話に続き四つの分科会へと分かれてユンタク(話し合い)、ふれあいタイム・コンプリン・朝の祈り、笹森司祭によるバイブル・シェアリングはエフェソの信徒への手紙 2 章 11 節から 22 節まで「和解、平和、一致」をキーワードに学び、再びそれぞれの地に戻っていく姉妹たちへこれから(何を希望し何を祈り何をなすべきか)の課題が与えられた。

初日から再会、出会いの喜びでホール

は明るい声に満ち、2日、3日目と盛り上がり沖縄でのフォーラムは閉会礼拝へと進んだ。振り返りの中からまとめの「シンボル」を目に見えるものでささげることになり、(平和へのエネルギーは黒砂糖・沖縄の文化は三線とナベ・嘆きの壁破り?・ロウソクの炎)がわたしたちの決意としてさしだされました。この日参加者の献金は総意として、「辺野古基地建設反対の運動資金」に用いてもらうことが決まったこと、主に感謝。

「わたしたちのうちに働く力によって、わたしたちが求めまた思うところの一切をはるかに超えてかなえてくださることができる方に、教会により、またキリスト・イエスによって、栄光が世々に限りなくありますように アーメン」

(エフェソ 3 : 20、21)

*** 第 15 回 女性フォーラムに参加して ***

関ノリ子(東京教区)

2007 年 7 月 5 日(木)～7日(土)に沖縄の島袋諸聖徒教会で行われた第 15 回女性フォーラムに参加できて幸いでした。プログラムを作ってくくださった方々、細かい準備をして迎えてくださった沖縄の皆様には感謝いたします。

開会礼拝では沖縄の海を意味する青い布を敷いて低いところに祭壇がおかれ、神様が私たちの近くにいてくださる

ことを感じました。祈りが、共に歌う聖歌が、私たちの心をひとつにしました。洗手では二人ずつ一組になってお互いの手を洗い、言葉をかけました。ここで出会ったことが嬉しくて、喜びに包まれました。水の中には沖縄の美しい花がいっぱいでした。

その後、沖縄の方たちが「トートーメーとキリスト教」についての寸劇をして

くださいました。トートーメーについての講演もありました。沖縄では家父長制の中で先祖を大事にすることで、長男嫁は忙しく、お盆などのときは特に大変とのことでした。男性中心の社会で男の子を産めない女性の辛い立場もあります。家族制度の中で男子を産むことを求められることは東京でもありました。お互いに話し合うことによって理解し、希望をもつことができました。

沖縄の方たちが沖縄の舞踊を踊ってくださいました。沖縄の文化を見せていただきながら沖縄の皆様のお気持ちに感動しました。

2日目には朝の礼拝の後、朴美賢司祭から「韓国と沖縄で出会った女性たち」と題しての講演がありました。女性としての問題についても伺うことができました。女性の教役者としても困難な現実があります。

午後の分科会では、トートーメーとキリスト教、沖縄の文化、9条と平和と基地、女と男(人と人)に分かれての学びでした。私は「9条と平和と基地」のグループで嘉手納基地の見学に行き、谷主教から現状のお話を伺いまし

た。沖縄の青く広い空、きれいな海のすばらしさに目を奪われますが、その沖縄に日本全体の75%の基地があり、様々な問題を抱えている現状を私たち自身の問題として受け止めなければならないと思います。

夜のバイブル・シェアリング、聖書の学びは笹森田鶴司祭の指導で行われました。このように落ち着いた学びの時が与えられて幸いでした。

創造的なすばらしい礼拝が行われたこと、各地から集まった方々との交わりができたこと、沖縄の方が用意してくださったお食事のおいしかったこと、豊かな時を過ごせた2泊3日でした。

閉会礼拝聖餐式は朴美賢司祭の司式で行われ感動いたしました。この女性フォーラムでまた一歩前進できたと思います。語り合うことは多く、この集まりの大切さを思いました。国際聖公会女性会議(および国連女性の地位委員会第51回会議)の様子もプロジェクターを使った写真で見せていただきまして、世界の女性の連帯も知ることができました。この女性フォーラムを準備してくださった方々に心から御礼申し上げます。



報告書より 閉会礼拝聖餐式

…キリストのまなざしの中で…

北海道教区主教 植松 誠

もう 10 数年前になりますが、私たち家族が大阪から東京に引っ越してから、しばらくの間息子が不登校になったことがありました。中学校の先生方もいろいろ手を尽くしてくださったのですが状況は好転しませんでした。教会関係にとっても良いカウンセラーがおられるということで、私の妻がその方とまずお会いすることになりました。妻が息子の様子を一通り話したあと、その方はこうおっしゃったそうです。「息子さんはご両親が張り巡らした柵を、今自分でこわして外に出ようとしているのです。それは本人にとっても痛みを伴うことですし、家族にとっても辛いことでしょう。でもそこを通らなければ息子さんは自分の行くべき道を見つけれないのです。」そしてそのカウンセリングは妻にとってのカウンセリングとなり、結局は私たち夫婦側の問題点を指摘されたのでした。

家庭は社会の縮図であり、善も悪も有しています。真珠は貝につけられた「傷」によってあの美しさが作り出されるそうですが、家庭も「傷」を得た時初めてそこに心を注ぎ、改めて自分の限界を知り、泣き、祈ります。そして初めて人の痛み思いを馳せるのです。知らなかった・・・こんなに辛いこととは思わなかった・・・。社会の縮図としてのそれぞれ

れの役割の中で、お互いに担っている重荷の違いを知り、その重さの違いを認め合い、手を差し伸べ、心を寄せ合うこと。それは、平等とか公平というところをはるかに超えたイエス様の視線の中で人を見ること、人として生きることではないでしょうか。

水を飲ませてほしいと昼間堂々とサマリヤの女に頼むイエス様は、誰も触れることのない女の痛みをえぐり出します。女性であるための理不尽さと不公平さを裁きもせず温かいことばの一つもかけず、イエス様は真正面からその女と向き合います、一人の人間として。街中で捕らえられたいわゆる罪の女もそうでした。イエス様は冷たく背中を向けて、地面に何かを書き続けます。石を手に持った人々が一人去り、二人去り、その中で、もしかしたら女自身も気付いていなかったかもしれない自分の汚れない貴い魂が主イエスの声を聞きます。「私もあなたを罪に定めない。行きなさい。」

真の平等とは、公平とは、隣人愛とは、回りを危険から取り囲むことでも、優しく包み込むことでもなく、ある時には殻を剥ぎ取り、あるいは殻を破って、出てくるその人自身の貴い魂を神様の宝として慈しむことではないか、それがイエス様の生き方ではなかったらどうかと思います。



「九州教区を駆け抜けた風・聖霊・神の息」

石田みち子司祭

司祭 吉岡容子（九州教区）

「九州教区を駆け抜けた風・聖霊・神の息」このようにあなたを名付けましょうか。モニカ石田みち子司祭。司祭接手より丁度9ヶ月でさっさと真の故郷へ行かれてしまって。「天国も人材難なのだろうなあ」「神さまもそろそろ女性の牧師を傍らに置きたくなかったのかなあ」「神さまの 右 にまっさきに白羽の矢がったのがあなただったのかなあ」「なあ、なあ、なあ」とつぶやいてばかりいる私です。「揺るぎなき確信」とはまさにあなたのためにある言葉。何かの会のたびに何度か同室の栄を受けながら凡人の悲しさ、「あのお方」がこれほどの制限時間を設けておられるなどと、毛一筋ほども気づかず・・・その確信と文字通りの真剣さにたじろいだり、ウーンと唸ったり、少しは冗談まじりにゆるしてネ、という私のはぐらかしの感じだったり、あなたの突き詰めた問いや語りをいつも正面から受けとめたわけではなかった私。いつもまっすぐにこちらの、相手の目を見つめ、まっすぐに混じりけなしの言葉で語るあなた。それが相手にど

れほどの「安心」つまり 主の平安 を与えることであるか。信徒がたのこともばや想いにそれをまざまざと実感させられたことです。「本当に素晴らしい方だったのです」と流れ続ける涙もぬぐわずに私の手を握って離さない方。「みち子先生は」と、まるで園児が先生を呼ぶような姿であなたのことを呼ぶ方々。「堅信準備の学習会はとても楽しかったです、ハレルヤ主と共に行きましょう！のあの透き通った声がどうしてももう一度ききたい！立ち直れないのです・・・」と電話をかけてこられる方などなど・・・。なんと罪作りな方なのでしょう、あなたは。

通夜と葬儀のとき、あなたの住まっておられた牧師館が教役者の控え室でした、私は定住いまだ数ヶ月という部屋のたたずまいを言い難い想いで見続けました。英国の神学校留学のときであろう外国の方々との楽しそうな写真の何葉、ふっと何気なく置かれた感の未だ幼い頃のダンス姿の少女の折の写真、つとめに関わる書籍類の中にずっと挿入され

ていた何冊ものレース編みの本。最初で最後のお見舞いをした帰り、信徒さんが開いたのであろう牧師館の窓に丁度心地よい加減の風に揺れていたレースカーテンをしばし見上げたことでした……。軟弱そのものの私とは全く正反対の型の牧師として教区に与えられたあなた。たった数ヶ月の定住牧師としての働きでこれほどの感化を果たせるものなのか？と、まさに「神のみ業」を見る想い。「だからある意味では私は説教には自信があるのです」と、どれほど経験を積んでも普通は出てこない言葉も、すべては神の成就なる確信のあなたにとっ

ては、当然すぎる言葉であったのですよね。まことに人に通じる言葉とは、中途半端な「人間理解」など木っ端微塵にしてしまうという厳粛な事実を思い知らされました。でも私はやはりあくまでこの地上の人間なのです。「主与え主取り去りたもう」は事実としてもその次の頌栄は未だに言い切れない、そんな人間たちも一杯地上にはいるのだ、その現実もまた上からの眼差しをお願いします！
みち子さん・・・

モニカ石田みち子司祭(九州教区)が2007年8月20日逝去されました。
ここに哀悼の意をささげます。

「タリタ・クム」について

「タリタ・クム」というのは、「少女よ、起きなさい」という意味のアラム語です。会堂長ヤイ口の願いにこたえて出かけて行き、死にかかっている幼い娘の手をとってイエスさまが言われた言葉です。(マルコ5:41) 今までジェンダーのために十分に発揮することのできなかつた女性たちのさまざまな潜在的な能力や感性や行動力が、神様の祝福によって主の栄光をあらわすためにより生き生きと用いられますようにという祈りと願いをこめて名付けました。(三木メイ)

大藪順子(のぶこ)さんは、アメリカ・ネブラスカ州オマハ在住のフォトジャーナリストです。

「STAND」Faces of Rape & Sexual Survivors Project (性暴力サバイバー達の素顔)というプロジェクトで性暴力サバイバー達の写真を撮り続け、アメリカ各地で写真展と講演会を開く。自らも性暴力の被害者である大藪さんは「性暴力は内なる殺人です。しかし、このプロジェクトを始めた私も、参加者たちもかわいそうと思ってほしいのではありません。この問題に対する意識があってもなかなか口にして提起できない、そんな人達、社会が性犯罪についての理解を深め、会話を始めるきっかけとなってくれればと願っています。」と呼びかけておられます。

ジェンダープロジェクトでは、昨年、エキシユメニカルな教会女性のグループから大藪さんの活動を知り、日本での写真展実現に向けて応援したいという気持ちを持ち続けてきています。(昨年12月にはボランティアな形で、京都において

大藪さんをお招きして「小さな学習会」が開かれました。) 今秋、日本での写真展や講演会が実現、本も出版されます。それに先立ち、「タリタ・クム」に原稿をいただくことができました。今期ジェンダープロジェクトの重点課題である「セクシュアル・ハラスメントへの取り組み」を考えるに当たり、牧師の娘でもある彼女の声は、教会にとってはきびしいものであるかもしれませんが、私たちが向き合わなければならない現実を語ってくれていると思います。

大藪さんの今後の活動予定については最終頁にご案内しております



STAND - 立ち上がる選択 -

大藪順子

9月11日。私の夫の誕生日でもある今日、2001年に起きたテロ事件の被害者への追悼イベントがアメリカ中で行われている。あの日亡くなった被害者達の命がむだにならないためにも、サバイバーであるこの国の人達に憎しみと差別が根付かないよう祈らずにはいられない。

去年の秋の帰国からアメリカに戻って以来、私は自宅にこもって本を書いていた。1999年に私の身の上で起こったレイプ事件から7年が過ぎ、読み返すことはないだろうと思っていた当時の日記帳を開いて過去を振り返る作業から始まったこの本は、『STAND - 立ち上がる選択 - 』という題でこの11月1日によく発行される予定だ。本を書くという作業の難しさもそうだが、それ以上に自分の過去と向き合い、当時の気持ちの整理をしていくという作業は精神的にとってもエネルギーを使う。

そんな中で、安心して暮らすという自分の基本的な人権を他人によって脅かされたり、奪われたりする経験は、被害者である人の価値を大きく左右するということを改めて学んだ。テロ事件後のアメリカ社会で大きくなったイスラム教徒に対する偏見と差別意識がその良い例かもしれない。個人レベルで言えば、レイプ事件後の私は、犯人への憎しみを通して無意識の中に潜んでいた差別意識と出会うことになった。具体的に言うと、私はレイプの後しばらく白人男性で高い教育を受けていない人を毛嫌いした。特にレイピストと容姿が似ている人には、私の態度はあからさまだった。それも自分の中に植えつけられた恐怖から、自分自身を守るためだったのかもしれない。人としての尊厳を失うのはとても怖いことだと思う。

よくレイプとは、加害者にとってはパワーとコントロールのためだと聞く。戦争があると必ずレイプは戦略の一つとして用いられてきた。もっとも、人の人権を平気で奪える加害者自身、自尊心がないからそんな行動の選択ができるのではないだろうか。自分に自信がないからこそ、弱者を力で抑圧しコントロールしようとする。そうすることでしか、自分の地位を維持できず、自分の存在の価値を見出せない人は哀れな人だ。

そんな加害者の低い自尊心の犠牲になる被害者はたまらない。レイプは魂の殺人だ。安心感が奪われ、恐怖との生活が始まる。うつだけではなく、様々な依存症に走ったり自分を切る人も多い。そしてその被害は被害者本人だけでは終わらないことが多いということを、私は今まで取材して来た性暴力の被害者達から学んできた。性暴力の被害で受けた心の傷や被害を機に始まった精神障害を抱えたまま結婚し子供ができたなら、家族にまで影響が及ぶ。被害者本人が気をつけていないと、それは連鎖反応のように次の世代へと受け継がれていくのだ。

2001年1月、ボストングローブ誌はカトリック教会の神父による性的虐待と、それを隠し続けてきた教会の実態を暴露した。それにより、今まで声を上げようとがんばっていた教会内の被害者達が公で声を上げられるようになったが、未だ教会という組織のリーダー達にこの問題を理解してもらうのは並大抵のことではないらしい。それは、今後も続くカトリック教会の被害者への対応や、お金で解決しようとする交渉態度から伺える。

教会は、人の魂の世話をし、神の与えてくれる平安と喜びと出会う場であり、そんな人

達が神の計画の中で歩む時の助けをしてくれる所ではないだろうか。いや、そう思うのも、私はまだナイーブなクリスチャンだからなのかもしれない。実際は、自尊心の低い神父や牧師のコントロール下で信徒達が利用され、拳句の果てにはセクハラや性的虐待が起こっている。そして、そんな教会組織のリーダー達は、被害者への対応よりも、加害者をかくまい、組織の立場を守る行動に走ってきた。そういう行動が被害者だけでなく、他の信徒達の信仰をも踏みにじる行為であることを、「聖職者」としての教会リーダー達は知っているだろうか。こんなリーダー達を神はどう見ているのだろうか。考えただけでも怖い話だ。

誰もが来れて安全な場所。牧師の娘である私はそう信じて育ってきたが、性暴力の被害者達の取材をする中、教会が恐怖の場と化しているのを目撃してきた。おかげで、私は昔から確立されている組織としての教会に希望を抱かなくなった。

だからといって、神にも希望を抱かなくなったわけではない。全く逆だ。神はレイプという被害を通して、私に多くの被害者達と出会わせてくれ、想像をはるかに超えた人脈ができ、大きな門を開いてくれた。アメリカの田舎の新聞社で働くフォトジャーナリストが、全米規模で写真プロジェクトを展開し、アメリカで選挙権のない私が、ワシントンDCで上院議事女性問題特別議会のパネリストとして発言力を与えられた。

教会へ行くだけでクリスチャンとしての肩書きに満足しているだけでは、本来神が私達に与えられている「仕事」をまっとうできないばかりか、その後に用意されている祝福を受けることはできないと、私はレイプという究極な試練を通して学ばされた。

今回、本の執筆を通して、改めて神の力のすごさを思わずにはいられなかった。絶望の中で、行き詰った時、迷った時、悲しい時、疲れた時、その時々には神は聖書を通して私に語りかけて道を示し、勇気を与え、実際に行動を起こすための力を与えてくれた。聖書は「Living Word(生きた言葉)」と言われている意味が、実体験を通してようやく理解できたのだ。

レイプ被害直後、救急病院から親友のアパートに避難した時、ベッドの横においてあった聖書を開くと「立ち上がりなさい」と神は私に語られた。「これはあなたの仕事です」と。立ち上がる選択をしなければいけない被害者。教会がそんな人達の苦悩を無視し、被害者に「許しなさい」と説教だけしてさらに絶望へと追い込む実態があるとしたら、それは新興宗教と同じではないだろうか。教会の焦点が神に当てられていたら、不祥事があってもちゃんと罪を認め、堂々と謝ることだってできるはずだ。

人間は完全ではないから間違いを起こすのも当然だ。でも同じ間違いを再び起すか、繰り返さないように気をつけるかの選択枠は誰にでも与えられている。カトリック教会の性的虐待スキャンダルも、日本の教会内のセクハラ問題も、教会がいい加減に生ぬるい

世界から立ち上がり、正しい選択をするよう迫られている警告と受け止める事ができたら、これから先、どんなに沢山の人の魂を救う事ができるだろうか。

9月11日のテロ事件から6年。ワールドトレードセンターの跡地には、新しいビルの工事が進められている。そうやって教会も建て直す事ができたらいいのと思う自分がいる。いや、パワーとコントロールを維持しようとする教会の不祥事が続く中でも、神はすでに立て直すのに必要な人材を用意されているはずだ。その時がくるまで、教会に集う人たちが神への希望をも失わないよう祈っている。

大藪順子(おおやぶ・のぶこ)さん プロフィール

- 1971年 大阪府豊中市に生まれる。
- 1995年 アメリカ、シカゴのコロンビア・カレッジ、フォトジャーナリズム専攻を卒業後、新聞社の専属フォトグラファーとして7年間働き、2002年、フリーに。
- 1999年 自宅で就寝中にレイプの被害に遭い、以来うつ状態が続く。
- 2000年 親しい牧師からの助言で、懲役20年に服する犯人に手紙を書くことで精神的に解放された。
- 2001年 「同じように傷つき、生きていく人たちの姿を伝えたい」と、STAND: Faces of Rape & Sexual Survivors Project (プロジェクト「STAND:性犯罪サバイバー達の素顔」)を立ち上げ、男女70人を約2年かけてアメリカとカナダで撮影、取材をする。
- 2002年 アメリカのドキュメンタリー番組、「もう恐れない 女性への暴力をとめよう」に出演。これを機に同プロジェクトは全米の大学やギャラリー、また、ワシントン D.C.の上院議会ビルで展示され、全米各地で講演活動を行うようになる。
同年 アメリカ国会議事堂での性犯罪防止会議のパネリスト、ポインター研究所での性犯罪報道を考えるフォーラムの講師を務める。
- 2005年 アメリカ政府機関である犯罪被害者援助機関のCMに出演。
- 2006年 大阪、広島、新潟、福岡で行った日本での講演が反響を集め、週刊朝日、Days Japan、朝日新聞、毎日新聞、中日新聞にて紹介され、テレビ朝日にも出演。
- 2007年 いのちのことば社フォレストブックスより『STAND - 立ち上がる選択』と題して本が出版される。

現在、フリーのフォトジャーナリストとしてジャーナリズム以外の分野でも活躍するほか、全米性暴力調査センターの名誉理事、幼児虐待防止対策機関の役員を務める。夫と娘と共にアメリカ・ネブラスカ州在住。

研修・公開学習会を東京で開催しました

去る8月6日～8日、東京教区牛込聖公会聖バルナバ教会・管区センターを会場に、管区の正義と平和委員会ジェンダープロジェクトと女性デスクの共催で研修・公開学習会を開催しました。その目的は、今後各教区でジェンダーの課題の取り組みを広めるために、プロジェクトのメンバーの研修、一部のプログラムをオープンにして、首都圏の教会の女性たちを中心に参加をよびかけ、情報を分かち合うこと。2日目の公開学習会についてご報告します。「ジェンダー 今、むかし」をテーマにして、以下のようなプログラムを行ないました。

第1部 フィールドトリップ 歴史の中のジェンダー 30名参加

* 講演「戦時下の女性と現代の課題について」

講師：東海林路得子さん（戦争と女性への暴力日本ネットワーク共同代表）

* 遊就館・靖国神社見学

ガイド：山口明子さん（NCC 日本軍強制「慰安婦」問題特別担当）

第2部 ハラスメントを考えるワークショップ 32名参加

今回は、東京開催ということで、アクティブミュージアム「女性たちの戦争と平和資料館」と靖国神社にある遊就館を見学したいと企画しました。今、社会や私たちの教会の中で起こっているハラスメントの課題に取り組む中で、戦時下の女性への人権侵害や差別、戦争にみる権力構造を省みることなしには現在の課題に取り組むことはできない、という思いを抱いてきました。私たち一人ひとりの中に深く刷り込まれた「差別意識」に気づき、何故なのか探り、克服し、今目の前でおこっているジェンダーをめぐるさまざまな出来事に気づく感性を養わなければなりません。同時に、被害者に寄り添って尊厳を回復する過程の中で、当事者との和解をもたらす道を、共に捜し求めたいと思います。

プログラムの中で、東海林路得子さんが、「慰安婦」問題が今日まで続くのは、問題の隠蔽と、謝罪すると被害国から低くみられるという日本政府の傲慢さと優越意識であると指摘されました。課題の克服のために、私たちキリスト者がどのようなプロセスをたどるべきか、東海林さんは次のようにおっしゃっています。「人間の痛みを共有は、一時的な同情ではなく、同伴（プロセス）において可能になる。その視点から聖書を読み、社会に関わっていきこう。プロセスがないと、私たちは喜びも痛み（怒り）も共有できない。」

第2部のハラスメントを考えるワークショップには、男性信徒や教役者の参加も多く得られました。ワークショップの中で、主の平和、結婚準備、愛餐会など日常の場면을寸劇で表現し、参加者の気づきを引き出だそうと試みてみました。寸劇を見て、「どこが問題？」という方たちもみられましたが、見解の違いを分かち合うことで一人ひとりが新たな気づきを得られたのではないのでしょうか。今後も各教区でこのような「気づき」の取り組みを重ねていきたいと思います。(報告者：西原美香子)

ジェンダープロジェクトより

今年の夏は連日の猛暑で、やはり地球に異変が起きているということを感じずにはいられない毎日でした、みなさま方におかれましてはいかがお過ごしでしたでしょうか。8月7日に開催した、女性デスクと共催の公開学習会にはたくさんのご参加をいただきありがとうございました。こちらの不手際もあり、予定していたプログラムが変更になった部分もありましたが、共によき学びの時をもつことができ感謝です。このような公開学習会を今後も場所を変え、いろいろな地域で開催できたらと願っています。また、現在のジェンダープロジェクトメンバーの任期は来年の日本聖公会総会までとなっていますが、今期の重点課題となっている「セクシュアル・ハラスメント」への取り組みを具体化すべく、教役者へのアンケートの実施などを検討中です。「セクシュアル・ハラスメント」は「教会で起きるはずがない。」と思われていることがらの一つですが、教会に連なる人がその思い込みからぬけだし、傷ついた人の視点に立つことができるように努力していきたいと思います。

「第1回日本聖公会女性会議参加者」のみなさまへ アンケートのお願い

昨年箱根での「第1回日本聖公会女性会議」から早や1年が過ぎました。今回、参加者のみなさまには「女性会議その後」ということで簡単なアンケートを送らせて頂きました。今後のジェンダープロジェクトの活動に、また第2回女性会議開催の参考にしたいと思いますので、忌憚のないご意見をいただければ幸いです。用紙はハガキとFAX用のA4用紙を同封しています。何かとお忙しいことと存じますが、どちらかの方法で返信いただきたく、ご協力よろしくお願いいいたします。**締め切りは10月末日**とさせていただきます。なお、アンケートの結果は「タリタ・クム」紙面にて報告させていただく場合もあります。その旨ご了承下さいますようお願いいたします。

(恐れ入りますが、ハガキで返信の場合は切手を貼って投函してください。)

シリーズ「聖書の中の女性たち」

ミリアムにみるリーダーシップ 出エジプト記 15章 20 - 21 節、民数記 12章 15 節

西原美香子(中部教区)

15章 20 21 節 「ミリアムは彼らの音頭をとって歌った。」

この聖書の箇所は、エジプトで奴隷として過酷な労働を強いられ、人間として尊重されずに非常な苦しみの中にいたイスラエルの民が、モーセに導かれながら苦難を強いられつつもやっとの思いでエジプトを脱出した直後の様子を記しています。エジプト脱出という神の大きな計画の実行リーダーとしてのモーセは、いく度も自信を失い思いわずらいました。そのようなモーセを神は叱咤激励します。「あなたにはレビ人アロンという兄弟がいるではないか。」(4章 14 節)とアロンをモーセの助け手であることを知らされました。もう一人の助け手、姉ミリアムの具体的な行動は聖書にはアロンほど記述されていませんが、この15章 20 - 21 節は、ミリアムが小太鼓をもって踊り歌い音頭をとると、女たちも男たちも楽器を手に踊りながらミリアムの後に続いて行ったと記しています。ミリアムがいかに集団の中において、人々と共に喜び、歌い、共に踊っていたかを想像できる箇所です。



ここで私が想像する情景を一枚の絵にしてみました。この絵は随分前にこの箇所を読んだときに描いたものですが、今読み返してもう一度描くとすれば、ミリアムをもう少し歳とらせ、多くの女性たちと輪を描いて踊り歌う様子を描き、エジプト脱出の喜びを表現してみたいと思っています。

当時は男性中心社会でした。女性は物の数にもはまらないし、名前を呼ばれたことすらなかった者もいたといわれます。ミリアムも社会の周縁におかれ、抑圧されてきた女性たちの一人であったことでしょう。そのような抑圧との闘いの中で生き続けなければならぬミリアムを解放した出来事があるとすればそれは何か。なぜイスラエルの民たちと共にいることができたのか、とても興味深い点です。

民数記 12章 15 節「民は、彼女が戻るまで出発しなかった」

エジプトを脱出したイスラエルの民たちは、長年荒野を放浪します。その群れは年月とともに民が増え、次第に大きな集団となっていました。モーセはその集団の頂点にいましたが、多くの人々の苦しみを直接自分自身で対処できないと神へ嘆きます。一方

ミリアムは人々共において、共に苦しむ姿勢をとろうとしました。人々の不満をモーセに届け、モーセを諭します。

周縁に押しやられた民たちと共に生き、民たちのために働いたミリアムは、重い皮膚病になりました。皮膚病は忌み嫌われた病気で、当時は神の罰として考えられていたようです。ミリアムは病のために宿営の外に7日間の隔離されてしまいますが、「民は彼女が戻るまで出発しなかった」(民数記 12 章 15 節)、つまり人々は、神の罰を受けたとされ疎外されたミリアムの側を動かさずとしました。そこには、社会から疎外されたミリアムを支え続けてくれた共同体があったと考えます。そのように寄り添い支え合うチカラを育てたのは、まぎれもなくミリアムではないでしょうか。

ミリアムにみるリーダーシップは、指導者モーセのような三角形の頂点に立つ縦型リーダーシップではありません。人々の思いに寄り添って共に悲しみ・喜ぶチカラ、ときには強い意志をもって課題の解決のために立ち上がるチカラを人々につけるものでした。

現在、さまざまな組織の中で縦型のリーダーシップをよくみます。教会も例外ではありません。そのような中であって、私たちジェンダープロジェクトは、ミリアムのようなリーダーシップをとって、さまざまな人々の声を聴き、課題解決のために声をあげ、共に励まし合って変革していくチカラをつけていくものでありたいと願います。

♪ Book Review07

評者：吉谷かおる

『オンナらしさ入門(笑)』小倉千加子著、理論社、2007年、1200円＋税

『青年のための読書クラブ』桜庭一樹著、新潮社、2007年、1400円＋税

とかく少女は生きにくい。この夏は「少女」について考えてみました。日本で少女といえば、好んで路上にすわったりふとももあらわに闊歩していたりする姿を連想しがちで、好意的に見られないことも多いように思います。そのいっぽうでは、国連女性の地位委員会第51回会議のテーマも「女兒」であったように、年少女子が差別や性暴力被害などの対象となることを防ぐのは世界的な急

務といえます。しかし、このところの私の関心は、もっぱら少女をめぐる「もてる／もてない問題」に向けられていたのです。実は私は毎年夏の終わりを、凹んだ気分とともに迎えます。それというのも、その頃に中学の同窓会めいた小さな集まりが催され、そこには私が「いかに恋愛感情の対象でなかったか」を熱く語るもと男子が必ず誰かかれか現れるからなのです。長い付き合いだし、そも

その昔から少しも可愛くなかったの
で、あんなに可愛かったのに、とだけは
誰にも思われていないだろうと想像す
るのは心の慰めにはなりません。でもその
場では精神年齢も中学生レベルに戻る
せいか、なぜそんなにもてなかったのか、
とつい考えてしまいます(そりゃ容姿と
性格がよければもてたのかもしれない
けれど、それだけなのか?)。いまも「モ
テ女子」になりたいと願う現役少女は少
なくはないはずですが、いったい「もてる
/もてない」を分けるのはどんな要素な
のでしょうか。

『結婚の条件』*1で、なぜ結婚しない
女性が増えているのかを切り取って見
せてくれた心理学者の小倉千加子さん
が、中学生向け新書 よりみちパン!セ
の一冊として『オンナらしさ入門(笑)』を
ものしたというので、さっそく読んでみ
ました。この本は(笑)までがタイトルで
す。この著者がいかにすれば「オンナら
しく」なれるかを指南してくれるとは到
底思えないので、(笑)は必須です。にも
かかわらず、この本には悲痛な感じが漂
っています。というのは、著者は日本の
少女たちを励ますべく、「軽やかに生き
よう、女らしさなどという縛りは笑い飛
ばしてしまおう」というメッセージをお
くろうとしているのに、著者が女の子に
向ける視線が痛ましいものを見るかの
ようだから。それはおそらく、この社会
で女性が成熟した大人として生きてい
くのは簡単なことではないと知りつく

しているからなのではないかと思いま
す。女の子は誰に命じられたわけでもな
く、成長するにつれて、つねに自分がど
う見られているのかを厳しくチェック
するようになります。女らしさの規範か
らはみ出すと制裁を受ける(=もてない)
ことを敏感に察知した同級生たちの変
化、それは端的には「おしゃれをする」
「あまり勉強しないようにする」、とい
うかたちで表れていたことを思い出し
ます。とすると、もてない要素の代表格
としては「外見に気を遣わない」「遠慮
なく勉強する」が挙げられるのではない
でしょうか。さらに小倉千加子さんのみ
ならず、『負け犬の遠吠え』の酒井順子
さん、私の知り合いの女子大生など多く
の人が証言していることとして「ギャグ
を言う」というのもありますが、心当た
りはありますか?

もう一冊、これまたもてなかった高校
時代が鮮やかによみがえる本(泣)、桜庭
一樹著『青年のための読書クラブ』を取り
上げたいと思います。これは富裕層の少
女が通うカトリックの女子高校聖マリ
アナ学園を舞台に、はみ出し者が吹き寄
せられるように集まった「読書クラブ」
の秘密日誌というかたちで、学園100年
の裏の歴史を記したものです。学園の創
設者がカトリックの修道女であるとい
う設定がこの作品では非常に重要な
のですが、列聖の手続きなどカトリックに
ついての理解に不確かなところがある
のではないかと考えて、面白い小説であ

るにもかかわらず、すこし読みにくい面がありました。それさえ気にならなければ、「君」「僕」の人称で語る少女たちの言説、年に一度「王子」を選出する慣行をもつ学園生活、創設者マリアナにまつわる謎、未来には「他者」が出現するとの予言などをちりばめた物語は、頁をめくるのが惜しいほどいとしく感じられるかと思います。私がこの小説で重要だと思うことは、学園の歴史的珍事件を記録する語り手の少女たちが、演劇部、新聞部、生徒会などの表社会の勢力から卑賤視される「読書クラブ」に巣喰う者たち(アウトロー)であることです。彼女たちを裏返しのエリート集団と見ることもできますが、少女と読書の組み合わせは、歓迎されたためしがありません。掃き溜めの「読書クラブ」で薄い紅茶をすすりながら本を読んだ少女たちは、その後どんな人生を送ることになったで

しょうか。きつともてなかつただろうなあ。

ちなみに著者の桜庭一樹さんは、以前から少女を主人公とした作品で定評がありました。『赤朽葉家の伝説』*2で一気に声望を高め、読者層を広げた女性作家です。読みごたえのある小説を求めているかた、もしこの『赤朽葉家の伝説』を未読であれば、ぜひにとおすすめします。山陰の製鉄業を営む旧家の女三代にわたる神話的クロニクルといったもので、物語の骨格と、現実と非現実の絶妙のブレンド具合が、チリの魔術的リアリズムの作家イサベル・アジェンデ『精霊たちの家』*3を思わせる傑作です。

*1『結婚の条件』朝日新聞社、2003年

*2『赤朽葉家の伝説』東京創元社、2006年

*3『精霊たちの家』木村榮一訳、国書刊行会、1989年

ジェンダーの つぶやき

夏の参議院選挙開票日のこと・・・

当選した横峯良郎さんの弁

「さくらパパじゃなくて、横峯良郎と呼んでください。」

そうか・・・自分のフルネームを呼ばれないのは、(さんの奥さんや くんのおかあさんと呼ばれる)女性だけじゃなかったのね。(奥さんと呼ばないでと思っている私)

“ハラスメント” を考える (中)

日本聖公会は今年の3月末、セクシュアル・ハラスメントをはじめとするすべてのハラスメントを防止するための機関と相談窓口の設置をすすめるための「防止モデル案」を各教区に提示しました。この機会に皆さまと一緒に“ハラスメント”について考えてみたいと思います。

(管区 女性デスク)

今回は具体的な場面から“ハラスメント”について考えてみます。

* なお、実際の場面では、さまざまな状況があると思いますので、ここでは基本的な考え方について書いてみます。

場面はすべて、相手の言動を不快に感じている人がいる、という前提です。

しんせつ…?



親切からの行為でも、不必要に身体に接触するのはセクシュアル・ハラスメントです。

思いやり…?



性的な体験や家族計画など個人的なことに立ち入る言動もハラスメントです。

コミュニケーション…?



セクシュアル・ハラスメントは必ずしも男性から女性、というわけでもありません。

雰囲気…?



大切なコミュニケーションの場だからこれぐらい「してくれて当然」と相手に押しつけるのは、ハラスメントです。

ほめ言葉のつもりかも知れないけど・・・



たとえほめ言葉のつもりであっても
言い方によっては女性を軽視している、
あるいは性的な観賞の対象としてしか見ていない、
としてハラスメントと受け止められることがあります。

当然と思っていることでも・・・



牧師に迷っている気持ちを聞いてもらって、一緒に考えて欲しかったんだけど・・・

今まで当たり前のようにあった文化や慣習、また自分の持っている固定観念が、知らず知らずのうちに人を傷つけている、ということがあるかも知れません。
まず自分と相手の力関係を自覚することがハラスメントを防止することにつながるのではないのでしょうか？



「相手の気持ちを尊重することが コミュニケーションの基本です。」

次号へ続く・・・

大藪順子さん 活動予定

*著書 (11月1日刊行予定)

『STAND - 立ち上がる選択 - 』いのちのことは社フォレストブックス、1500円

*講演会&写真展

10月30日(火) 大阪ドーンセンター

講演会 10月30日(火)18:30~20:30

写真展 10月30日(火)11:00~18:00、10月31日(水)10:00~12:00

[問い合わせ先] 大阪YWCA女性エンパワメント部(担当 上田・幕谷)06-6361-0838

11月3日(土) 兵庫県三田市まちづくり協働センター6F 多目的ホール・ギャラリー

講演会 11月3日(土)14:30~16:30

写真展 11月2日(金)~4日(日)10:00~21:00(2日は14:00~21:00)

[問い合わせ先] 090-2017-1170(大村)

11月15日(木) 東京女子大学 秋季講演会

[問い合わせ先] 東京女子大学キリスト教センター 03-5382-6291

11月18日(日) 豊中男女共同参画推進センターすてっぷ

講演会 11月18日(日)15時~17時

写真展 11月12日(月)~18日(日)

[問い合わせ先] 06-6844-9773 (すてっぷ事業担当)

ジェンダープロジェクトの活動に関するお問い合わせは、下記にお願いいたします。

大岡左代子 073-422-0055 Fax 073-436-3333

正義と平和委員会・ジェンダープロジェクトは、教会におけるジェンダー問題の共有と女性たちの新しいネットワークづくりのために、機関紙として、ニュースレター『タリタ・クム』を発行しています。(年3~4回発行予定) 女性の方々はもちろん、ひとりでも多くの皆様にこのニュースレターを読んでいただけたら幸いです。よりよい紙面にしていくために、ご意見・ご感想をお待ちしています。この記録的な暑さの夏、災害、政界の混乱などいろいろなことがありましたが、お元気でお過ごしでしたか。今号はとくにお伝えしたいことが多く、頁数も増えてしまいましたが、これからの秋の夜長にゆっくりお読みいただければと思います。(吉谷)
